

グレンアイラ市に住む高齢女性の暮らしとライフヒストリー (その5)

野邊 政雄

メルボルンのグレン・アイラ市に住む3人の高齢女性に、①日常生活、②ライフヒストリー、③何に幸福感を感じるかの3点に関して聞き取り調査を2006年9月におこなった。本稿では3人の語りを提示し、それに考察を加えた。

Keywords : 高齢女性, メルボルン, パーソナル・ネットワーク, 主観的幸福感, ライフヒストリー

1 本稿の目的

筆者は日本学術振興会科学研究費補助金を得て、メルボルン (=メルボルン大都市圏) に住む高齢女性の暮らし、とくに、そうした女性が取り結ぶ社会関係に関する調査を2004年4月から始めた。2005年8月から9月にかけてメルボルンにあるグレンアイラ (Glen Eira) 市で65歳以上80歳未満の高齢女性を対象に調査票による標本調査をおこない、200人を調査することができた。グレンアイラ市は、メルボルンの中心から南東に10キロメートルほどのところにある。標本調査のあと、調査対象者のうち詳細な聞き取り調査に応じてよいと回答した7人の高齢女性を再度訪問し、日常生活やライフヒストリーについて聞き取り調査をおこなった。この聞き取り調査の結果は『研究集録』に「グレンアイラ市に住む高齢女性の暮らしとライフヒストリー」(その1) から (その4) として発表した。

翌年の2006年8月から9月にかけてグレンアイラ市の別の地区で同じ年齢帯の高齢女性200人に同様の標本調査をおこなった。標本調査のあと、調査対象者のうち詳細な聞き取り調査に応じてよいと回答した3人の高齢女性を再度訪問し、日常生活やライフヒストリーについて聞き取り調査をおこなった。標本調査の調査対象者に聞き取り調査をおこなったのは、そうした高齢女性がどのような日常生活をおくっており、これまでどのような人生を歩んできたのかを理解すれば、標本調査のデータの分析結果をよりの確に解釈できるだろうと考えたからである。

聞き取り調査の調査対象者をオーストラリアで生まれ育ったヨーロッパ系の高齢女性かイギリスからの移民に限った。調査対象者をこのように限定したのは、次の理由からである。高齢女性の日常生活やライフヒストリーは、民族によって大きな相違があると考えられる。メルボルンに住む高齢者を研究する第一歩として、調査対象者の多数をしめるオーストラリアで生まれ育った高齢女性やイギリスからの移民の高齢女性の日常生活やライフヒストリーを明らかにすることがまず必要である。そこで、オーストラリアで生まれ育った高齢女性とイギリスからの移民の高齢女性だけに絞って聞き取り調査をおこなった。

本稿では、2006年におこなった聞き取り調査の結果を提示し、それに考察を加えたい。

2 調査方法

知らない基本的事柄や理解できない俗語的表現に出くわしたときに、筆者がそれらを調査対象者に尋ねながら調査をしてゆくと、会話がうまく弾まなかった。そこで、筆者があらかじめだいたいの質問項目を作成し、雇用した調査員に質問をしてもらった。調査であらかじめ決めておいた質問項目は、①日常生活、②ライフヒストリー、③何に幸福を感じるかの3点である。調査員にこの3点を調査対象者に質問するように指示をした。このように、おおまかな質問をあらかじめ用意しておいたが、調査対象者に自由に語ってもらう非構造化インタビューをおこなった。筆者も聞き取り調査に立ち会った。調査対象

者が語った内容が不十分であるときや、話された事柄について更に詳細に調査対象者から聞き出したいときには、筆者が臨機応変に質問をすることもあった。会話をミニディスクレコーダーに録音し、テープ起こしをあとでおこなった。会話を理解できないときは、筆者はミニディスクのその部分を調査員に聞いてもらい、調査対象者の話の背後にある文化的・社会的背景を解説してもらったり、俗語的表現の意味を説明してもらったりした。

3 提示の方法

調査票による面接調査で、健康状態、活動能力、高齢女性のパーソナルネットワーク、主観的幸福感を測定した。これらは調査対象者の暮らしを理解するのに役立つから、その結果も提示しておく。

まず、健康状態は、調査対象者に1の「まったく健康である」から5の「病状が慢性的にとても悪い」の5段階で自己評価してもらった。

次に、活動能力は、ロートンの活動能力指標を用いた(Lawton 1972)。これは、「あなたは小切手を書いたり、支払いをしたり、金銭出納記録をつけることができますか。」といった10の質問に「問題なくできる」、「自分でできるがむずかしい」、「助けが必要」、「自分ではできない」の4つの回答からいずれかを選んで答えるものである。

それから、パーソナルネットワークの測定方法である。筆者(野邊 2000)は、かつてメルボルンで20歳以上55歳以下の女性を対象に調査をおこなったことがある。このときに、パーソナルネットワークを測定するために開発した質問を用いて、高齢女性のパーソナルネットワークを測定した。これは、次のようなものである。高齢女性を取り結ぶ社会関係を測定するため、①回答者が入院した場合の世話、②200～300ドル(14,000～21,000円)の借金、③仕事上の話と相談、④心配事の相談、⑤失望や落胆をしているときの慰め、⑥留守のときの家の世話、⑦些細な物やサービスの入手、⑧交遊、といった8つの日常生活の状況で、サポートを仰いだり、交際したりする相手の名前を尋ねた。①～⑦についてはサポートを入手できる可能性にもとづいて、⑧だけは交遊したという事実にもとづいて名前をあげてもらった。また、①から⑤までの質問では同居する家族構成員を含めて相手の名前をあげてもらい、⑥から⑧までの質問では、同居する家族構成員を除いて相手の名前をあげてもらった。それと、③の質問は就業している回答者にのみ尋ねた。回答者がこれら8つの質問で少なくとも1回相手の名前をあげたときに、回答者はその相手と社会関係を取り結んでい

るとする。こうして名前をあげられた相手それぞれについて、①間柄と②居住場所を尋ねた。あげられた人は間柄によって、①同居家族、②(同居家族外の)親族、③近所の人、④友人、⑤職場仲間(上司や同僚)の5つに分けた。これらの社会関係数を合計して、パーソナルネットワークの規模(=社会関係の総数)を算出した。居住場所は、①歩いて15分以内の地域(以下では、「近隣地域」と呼ぶ)、②(近隣地域を除外した)サバーブ、③(近隣地域とサバーブを除外した)メルボルン、④(メルボルンを除外した)ビクトリア州、⑤(ビクトリア州を除外した)オーストラリア、⑥外国の6つのうちのどこかを尋ねた。

最後に、主観的幸福感は、ロートンのPGCモラルスケールを用いた(Lawton 1975)。これは、「あなたは自分の人生が年をとるにしたがってだんだん役だたなくなってくると感じますか。」といった17の質問に「はい」か「いいえ」で答えるものである。そして、高いモラルと関連する選択肢を選んだ場合に1を与え、そうでない場合は0を与える。この得点を17の質問について合計してゆくので、値は0から17まで分布する。言うまでもなく、得点が高いほど幸福感が高いということになる。

高齢女性の話をできるだけ臨場感をもって再現するために、高齢女性の話は一人称の形で紹介する。質問項目の順番に高齢女性の話を紹介してゆく。話はそのまま日本語に翻訳して紹介をしているわけではなく、若干の編集をおこなっている。というのは、調査対象者は、必ずしも、話をまとめて、論理的に話してくれたわけではないからである。例えば、調査員が日常生活について尋ね終わって、別の事柄を尋ねているときに、調査対象者が思い出したように日常生活について再び話し始めるといったことがあった。もし調査対象者の話をそのまま日本語に翻訳すると、日常生活についての話がさまざまところに分散して、理解しづらくなってしまふ。だから、日常生活についての話は最初にまとめることにした。このように話を整理するといった編集はおこなっている。本文の括弧内に書いてあるのは、話の背後にある文化的・社会的な事柄の解説である。人名は、すべて仮名にした。

4 3人の語り

(1) マーガレット

マーガレットさんは1939年生まれで、無宗教である。夫婦二人で、フラット(平屋建てのいくつかの家が繋がった長屋形式の住宅)に住んでいる。夫も1939年生まれである。彼女はイギリスの田舎町

(town) で生まれ育った。ロンドンの教員養成大学で勉強し、教員となった。子供が小さいとき、専業主婦を一時していたが、教育に長い間たずさわってきた。夫がオーストラリアでの仕事に就いたので、1982年にメルボルンへ移住した。オーストラリアでも教育にたずさわって、2000年に退職した。

マーガレットさんは自分の健康状態を2と評価していたから、健康状態は比較的良いといえる。ロートンの活動能力指標によれば、彼女は10項目のうち9項目を「問題なくできる」と、1項目を「自分でできるけれども、むずかしい」と答えていたから、活動能力はとても高いと判定できる。マーガレットさんのパーソナル・ネットワークは、夫、2人の息子、1人の息子の妻、2人の近隣者、6人の友人から構成されている。2人の近隣者は「近隣地域」にあり、2人の息子、1人の息子の妻、すべての友人は「メルボルン」に住んでいる。ロートンのPGCモラル・スケールの得点は14点と、幸福感は高い。

マーガレットさんの年譜は、表1のようである。

表1 マーガレットさんの年譜

| 年(年齢) | 出来事 |
|------------|-------------------|
| 1938年(0歳) | イングランドで出生 |
| 1956年(18歳) | ロンドンの教員養成大学に入学 |
| 1958年(20歳) | 教員養成大学を卒業 |
| 1962年(23歳) | 結婚 |
| 1962年(24歳) | 長男が生まれる |
| 1965年(27歳) | 次男が生まれる |
| 1968年(30歳) | 三男が生まれる |
| 1973年(35歳) | フルタイムの教師となる |
| 1982年(44歳) | オーストラリアへ移住する |
| 1983年(45歳) | 働き始める |
| 1994年(56歳) | 学士号を取得。幼稚園の園長となる。 |
| 2000年(62歳) | 園長を退職 |

①日常生活

毎日、朝起きて、シャワーを浴び、朝食を食べます。たいてい、ベッドにいる夫のところに紅茶を持って行ってあげます。私は早起きで、6時か6時半に起きます。日中に散歩しないときは、朝食の前に散歩します。20分から30分とても早足で歩きます。私は朝食の前に庭の手入れや水やりをしますから、夫とは別に朝食を取ります。朝食の後、私は新聞のエイジ(The Age)に載っている暗号クロスワード(cryptic crosswords)を解き始めます。そうすると、私はそのことばかりを考えています。すぐにクロスワードを解けない場合は、昼間コーヒーやお茶の小休憩をするときにそれを解きます。

月曜日には、雑用をします。縫い物をしたり、誕生日の贈りものを作ったり、工芸品を作ったり、クリスマスの飾り付けをしたり、工芸品を作るために

買い物に行ったり、手紙を書いたり、Eメールをしたりします。夫のピーターもコンピューターを使いますから、コンピューターの取り合いになります。でも、ピーターはたいてい月曜日に家にいませんから、私はEメールを月曜日にします。ピーターは私と同じ年齢で67歳ですが、ピーターの方が少し若いです。私の言い方をすれば、月曜日は「私の自由日(my free day)」です。特別にすることがないときには、読書をしします。私は夕食をいつも作ります。6時半から7時に夕食を食べます。夕食前に、私たちはワインを飲みます。ピーターが夕食の後かたづけをしします。夕食の後に、テレビを見たり、録画したテレビ番組を見たりします。あるいは、読書をしたり、音楽を聞いたり、ビデオを見たりします。10時に寝ます。

火曜日には、家のことをしします。家の掃除をしたり、洗濯をしたり、アイロンがけをしたりと家のことをしします。朝の散歩をしないで、すぐに洗濯をします。火曜日に何か別のことをしないとイケないときには、月曜日と火曜日を交替して、月曜日に家のことをしします。午前中にコーヒーの小休憩を一回取り、午後とお昼にお茶の小休憩を一回取ります。そして、毎日、暗号クロスワードを解きます。夕方と夜の過ごし方は、月曜日と同じです。一週間に一度、レストランから持ち帰り料理(take-away)を買って来たり、友人と一緒にレストランに行つて夕食をしたりしします。たいていは友人と一緒にレストランに行きます。持ち帰り料理を買ってきたり、夕食をしたりする日は、週によって違います。今週は今夜、友人と外で食事をしします。

水曜日は、一日中、孫のうちの一人を世話します。その孫は14ヶ月です。孫は朝9時に家に来ます。孫が毎日やることに合わせて、私はその日をおくりします。孫がこの家に来ると、私はまず孫と遊んであげます。その後、私がミルクをあげると、孫はそれを飲み、寝ます。そうすると、私はコーヒーの小休憩をし、暗号クロスワードを解きます。孫が起きると、私は昼食を孫と一緒に食べます。この頃、孫は一人で食べられるようになりました。午後にまた孫と遊んであげます。天気良ければ、いつも孫を外に連れて行ってあげます。これが、私の水曜日の散歩となります。孫は末の息子の娘です。孫は午後5時までこの家にいます。息子の妻は水曜日に年上の子供たちを放課後水泳教室に連れて行ってあげたり、日ごろできないおつき合いを友人としたり、歯医者に行ったり、美容院に行ったりしします。見たい映画があるとき、私は夫と水曜日の夜に映画をよく見に行きます。夫は火曜日と木曜日にゴルフをする

ので、遅くまで帰宅しません。そして、火曜日と木曜日にはたいてい7時半に夕食を取ります。ですから、映画に行くのは水曜日になります。夫は土曜日にも、ゴルフに行きます。

木曜日の昼間のいずれかの時間に、私は買い物に行きます。午後に何かやることがあれば、午前中に買い物に行きます。逆に、午前中に何かやることがあれば、午後に買い物に行きます。今はコンピュータの講習会へ午前中に3時間行っていますから、買い物を午後に行っています。講習会は、グレン・ウェーバリー (Glen Waverly, メルボルンの中心から東南東に18キロほどのところにあるサバープ) で開かれています。私は幼稚園の園長をシンドール (Syndal, グレン・ウェーバリーにある鉄道の駅) でしばらくしていました。そこに住んでいる、かつて私の助手であった人が昨年その講習を受講し、私にその講習会のことを教えてくれました。60歳以上の人のために開かれているコンピュータの講習会です。その講習会の魅力は授業料が安いことです。この家の道路を挟んだ前に老人大学 (University of the Third Age) がありますが、私が行っている講習会は授業料が老人大学よりも安く、10週間の講習でわずか65ドルです。ファミリー・アンド・チャイルド・ネットワーク (Family and Child Network) という団体が講習会を開いています。その団体は州政府の財政的援助を受けています。そこには保育施設があったり、障害などのために特別なニーズのある子供たちが毎日通っていたり、10代の若者のために職業訓練をしたりしています。その団体は幅広い活動をしています。その団体のほとんどの職員にコンピュータを教えることが必要だということで、コンピュータの講習会はもともと始まりました。職員にコンピュータを教えることが必要でなくなった後も、職員は自分の家族や友人にその講習会のことを話したので、職員以外の人々が雪だるま式に受講するようになりました。そこではケータリングも教えているので、コンピュータの講習会だけでなく、料理教室も開かれています。すべての講習が60歳以上を対象としているわけではありません。インテグレーション・エイド (integration aid) のクラスもありますが、そのクラスに行っているのは概して若い人たちです。公立学校や私立学校に通っている生徒が特別な支援を必要とするとき、その団体は生徒が学校で毎日の授業についてゆけるように支援しています。その支援がインテグレーション・エイドと呼ばれています。学習障害などのために支援が必要な生徒をそこに連れて行くと、一対一で20分とか30分指導をしてもらえます。その後、その生徒

は自分が通っている学校に戻ります。

私がコンピュータの講習を受けているところでは、理由はわかりませんが、工芸のクラスが木曜日や金曜日に開かれます。木曜日にコンピュータの講習会がないときには、私は木曜日や金曜日に工芸のクラスに行きます。そこでいろいろな工芸を習っています。刺繍による壁掛け、中国画、クロスステッチなどです。

金曜日には、夕食をいつものように取ります。金曜日にも、洗濯や掃除をたいていやらないといけません。たいてい美容院に行きます。外出しますから、ついでに買い物もします。それと、金曜日には、幼稚園にも行くようにしています。その幼稚園で、私は過去2年間にわたってボランティアとしてある男の子を助けてきましたが、今はそれをやっていません。その子はダニエルといいます。今年、その子は学習や生活上の支援をその幼稚園で受けています。連邦政府や州政府は4歳未満の子供の指導に財政的援助をしませんので、その子は昨年まで支援を受けることができなかったのです。その子は歩けませんでしたから、助けがないと幼稚園に通園できませんでした。今は足にボトックスの注射 (botox injection) をしています。このおかげで、自分で立つことができるようになりました。とても頭のよい子です。その子には身体的な障害があるだけです。足がわるい上に、その子は視力がとても弱いのです。最近、眼鏡を替えたら、その子はとても変わりました。たぶん、眼鏡レンズの以前の処方箋がよくなかったのでしょう。

この子の前に、私は私の友人の息子をダニエルと同じ幼稚園で支援していました。その子は幼稚園で学習や生活上の支援をもう1年受けることが実際に必要でした。しかし、政府はその子が幼稚園でその支援をもう1年受けるための費用を負担しませんでした。政府は場所を提供してくれただけでした。私はボランティアでその子を助けてあげました。当時、その子は5歳半でした。その子にはさまざまな学習障害がありましたし、今でもあります。出産のときに、その子の脳が傷つけられてしまったのです。来年にはそうした支援を必要とする子が幼稚園になくなるかもしれませんが、私は幼稚園と関係をまだ持ち続けています。その幼稚園はパークデール (Parkdale, メルボルンの中心から22キロメートルほど南東にあるサバープ) にあります。

持ち帰り料理を買ってくるとすれば、金曜日にそうします。フットボール (オーストラリアン・ルールズ・フットボール) の試合を見に行くのは、金曜日か土曜日です。私たちはディーモンズ (The

Demons, オーストラリアン・ルールズ・フットボールのチームである Melbourne Football Club の愛称。メルボルン・クリケット・グラウンドをホーム・グラウンドとしている）を応援しています。私たちはメルボルン・クリケット・クラブ（オーストラリアで最も歴史のあるスポーツ・クラブで、メルボルン・クリケット・グラウンドを管理している。正規会員になると、このグラウンドで開催されるオーストラリアン・ルールズ・フットボールとクリケットのすべての試合を観戦できる）のメンバーです。ですから、フットボールのシーズン中には週末はメルボルン・クリケット・グラウンド（メルボルンの都心近くにある、オーストラリア最大のスポーツ・スタジアム）にしばしば行きます。私たちはテルストラ・ドーム（メルボルンの都心の西隣にあるスタジアム）には行きません。私たちはメルボルン・クリケット・クラブの会費を毎年払っていますから、メルボルン・クリケット・グラウンドに入るために更に入場料を払わなくていいのです。テレビでスポーツの中継をよく見ます。私は自分ではしませんが、ゴルフに興味があります。私たちはケーブル・テレビに入っていて、スポーツのチャンネルをよく見ます。私たちはクリケットが大好きですから、テレビで試合を見ます。クリケットの試合がメルボルンで開かれるときは、試合を見るために毎日メルボルン・クリケット・グラウンドに行きます。今年はイングランドのチームがメルボルンに来て、国際試合（test match）をします。ヒープ・フォー・ジ・アッシュズ（Heap for the Ashes）のカップ（クリケットの三柱門を燃やした灰を入れたカップで、イギリスとオーストラリアの国際試合に勝った国に与えられる）をかけた試合です。毎年、この季節（9月）の週末、私たちは外のどこかでスポーツをたいてい観戦しています。クリスマスにメルボルンで開催されるクリケットの国際試合を観戦に必ず行きます。

土曜日の午前中、夫のピーターと私はときどき外出して、朝食を外で食べます。私たちは二人とも今は退職しています。私たちが働いていたとき、私たちはしばしば外で土曜日の朝食を食べました。私たちが土曜日に外で朝食を食べないときは、外でコーヒーを必ず飲みます。この習慣は私たちがイングランドにいたときからのものです。夫は外国によく出張していました。夫は金曜日の夜になってようやく帰宅し、土曜日の午後はスポーツをし、日曜日には子供たちの相手をしていましたから、私たちがじっくりと話し合えたのは土曜日の午前中だけでした。土曜日の午前中に朝食を外で食べないときは、私たちは外でコーヒーを一緒によく飲んだものです。こ

の習慣を今でも続けています。ときには土曜日の午前中にビクトリア・マーケット（Victoria Market, メルボルンの中心にある大きな市場で、観光名所でもある）やブララン・マーケット（Prahran Market, メルボルンの中心から6キロメートルほど東南東のブラランにある大きな市場）といった市場の1つに行ったりもします。そして、私たちはコーヒーを一緒に飲みます。ピーターは11時半か12時にゴルフに行きます。何かやらないといけないことがあるかどうかによりますが、私は工芸品を土曜日の午後に作ります。2週間に1度ほど、孫たちが土曜日の夜に泊まりに来ます。その間に、子供夫婦は友人たちとおつき合いをします。孫たちが土曜日の夜にいるとき、夕食はスパゲティやフィッシュフィンガーズ（fishfingers, 細長い切り身の魚のフライ）といった簡単な食事となります。孫たちがいないとき、私たちは普通の食事を取ります。土曜日の夜に、友人を招いて夕食を取ることもあります。

孫がいないとき、私たちは日曜日の朝少し朝寝坊をし、一緒に散歩します。ときには、散歩の後、車に乗ってチェスターフィールド通り（Chesterfield Avenue, メルボルンの中心から8キロメートルほど南東のサバープであるマルベルン Malvern にある通り）にあるすてきなパン屋で特別なパンを買います。あるいは、ハンプトン通り（Hampton Street, メルボルンの中心から南東に10キロのところにあるサバープであるブライトン Brighton にある通り）に行き買い物をし、戻ってきます。日曜日の午前中にどういったことをしないといけないかによりますが、私たちはたいてい庭いじりをしたり、窓をきれいにしたり、洗車をしたりします。日曜日の午後にスポーツなどをしないとき、私たちは新聞を読み、私はクロスワードを解きます。何もしないこともあります。たいてい日曜日には、私は友人と昼食を外で食べたり、あるいは友人を自宅に招いたりします。私たちは歳をとったので、夜に車を運転して移動することがたいへんになってきました。そこで、この頃では、私たちは友人と夕食を取るよりも昼食を取ることが多くなりました。私たちにはとても親しい友人がマウント・イライザ（Mt. Eliza, メルボルンの中心から42キロメートルほど南南東にある、海に面したサバープ）にいます。私たちは1ヶ月に1度一緒に昼食を食べていますが、来月はその友人がこの家に来ます。この頃では、夕食よりも昼食をその友人と一緒に取るようになりました。日曜日の夜にはテレビを見ます。たいてい、ABC（公共放送）の番組を見ます。

②ライフ・ヒストリー

私はイングランドのケント州（Kent county, イングランド南部の東端にある州。ロンドンの南東にある。）にあるメイドストーン（Maidstone）に生まれました。そこは、イングランドの南東にあります。海岸ではありませんが、海岸に近いところです。海岸からは20分ほどでヨーロッパ大陸へ行けます。私はそこで生まれ育ちました。メイドストーンは田舎町（town）で、私が生まれ育った頃は、まわりに農村（country）が広がっていました。今では、家がそこに建ち並んでいます。都市（city）とはいえません。私が子供の頃は、果樹園を通り抜けながら歩いたり、サイクリングをしたりして、川（メドウェイ川, the River Medway）に行くことができました。今では、果樹園はもうありません。ケント州はイギリスの主なフルーツの産地の1つでした。ケント州のもう1つの有名な作物は、ポップでした。

私の父親は薬局をしていました。店の隣に自宅がありました。私は1938年に生まれました。第2次世界大戦がちょうど始まった年です。私の父親は年を取っていたので、第2次世界大戦中に徴兵されることはありませんでした。医者や私たちが住んでいた地域にはあまりいませんでした。ですから、病人が出たときには、夜にはいつも電話がかかってくるので、父親は薬についてアドバイスをしていました。私の寝室は薬局の隣にありましたから、夜中によく眠れませんでした。

戦争が激しくなったときに、両親は私たち姉妹を個人的に疎開させました。私たちの住んでいる近くで爆撃がおこなわれるようになったからです。私たちの住んでいたところはロンドンから40キロしか離れていませんでした。ドイツ軍はロンドンを爆撃しようとしていました。ロンドンをめざす爆撃機が私たちの町の上空をよく通りました。とても近くに、2つのかなり主要な飛行場がありました。その1つは夜間の爆撃で完全に破壊されてしまいました。その頃は、奇妙な時代でした。私たち姉妹は農村に送られ、私の祖母の縁戚の人と住むことになりました。祖母とその妹が迎えに来てくれました。父親と母親はメイドストーンにとどまって、働き続けました。伯父と伯母はガソリンを買えなかったので、車を走らせることができませんでした。代わりに、ポニーに荷車をつけて使っていました。私たちはポニーと荷車で1週間に1度市場へ行きました。私は、このことを今でもはっきりと覚えています。私の姉は私よりも3歳年上でした。2人の男の子のいとこも私たちと同じようにそこへ疎開させられていました。

年上の男の子は姉と同じ年齢で、年下の男の子は私と同じ年齢でした。私たちはそのいとこたちときょうだいのように一緒に暮らしていました。そのいとこたちとは今でもきょうだいのように親しくしています。この頃では会うことはありませんが、いつもEメールで連絡を取り合っています。

戦争が終わって、私はふつうの生活に戻りました。私は5歳から18歳までメイドストーンで学校に行きました。ピーターと私は姉妹校に通学していました。ピーターと私はお互いに知ってはいましたが、当時つき合っていませんでした。ピーターは、第2次世界大戦中ウェールズで育ちました。ピーターの父親は、第1次世界大戦の後にそうであったように、第2次世界大戦が終わったら不況になると考えました。そこで、ピーターの家族はウェールズからドイツ軍が最もひどく爆撃をおこなったケントに移り住みました。今から振り返ってみると奇妙な決断ですが、私は次のようなことからピーターの父親はそうした決断をしたと思います。ピーターの父親は学校の先生でした。彼は、坑夫の家族の出身です。彼は働きながら苦学して大学を出て、坑夫の状況から抜け出しました。ですから、坑夫に戻りたくありませんでした。教師としての就職口がケントにあったので、彼はそれに就いたのでしょう。彼にはそれ以外の選択肢はなかったのだと思います。

私は学校を卒業してから、ロンドンの教員養成大学で勉強しました。2歳から8歳までの子供を教育するコースで学びました。当時、そのコースは2年間の課程でした。卒業後、私は生まれ育ったメイドストーンに戻って学校で教え始めました。当時、両親が子供の大学の授業料を負担できないとき、ケント州はその子供に大学進学のための奨学金を出してくれました。しかし、卒業後、その子供は奨学金を返済するためにケントに戻って学校で2年間教えないといけませんでした。私は奨学金をもらっていたので、ケント州に戻って学校で教え始めたのです。学校で教え始めてから、ピーターと私は真剣に交際するようになりました。私が20歳のときからです。ピーターはオックスフォード大学で地理学を専攻しましたが、地理学を生かせる仕事に就くことができませんでした。そこで、彼は販売員になりました。彼はコンピューター産業でいろいろな仕事をしてきました。後年になって、マネージャーに教育をする仕事をしました。

私は1962年に23歳で結婚しました。私たちは予定していたよりも早く結婚することになりました。というのは、ピーターの母親が脳腫瘍で突然に亡くなったからです。彼女が病気と分かってから、1ヶ

月で亡くなりました。ピーターの父親はとても悲嘆にくれました。そこで、彼の世話をするために、私たちは結婚を早めました。結婚後、私たちはピーターの父親の家に住みました。長男のケリーは1962年12月に1ヶ月の早産で生まれました。長男が18ヶ月になるまで、私たちはピーターの父親と同居をしました。その後、私たちは同じ地域にある自分たちの家に移りました。私たちの家はコックスヒース(Coxheath)という村にありました。

ケリーが生まれたとき、私はいったん退職しました。しばらくして、障害があって特別なニーズのある子供を教える教師として、パートタイムで再び働き始めました。私が教えた障害のある女の子は学校に行かないで、自宅にいました。当時、障害のある子供は学校で教育をおこなうのではなく、自宅で教育をおこなうことになっていたからです。私は女の子の家に行って、1日に2時間教えました。私はケリーを連れてその家に行きました。私が教えている間、ケリーは女の子の姉と遊んでいました。このように、私は仕事と子供の世話をうまく両立させることができました。

次男のケ빈は1965年9月に生まれました。そして、私は仕事をやめました。私たちはケントを離れ、バークシャー州(Berkshire county, イングランド南東部にある州)のソニング・コモン(Sonning Common)に移り住みました。移った直後に私は妊娠して、三男のヒューが1968年に生まれました。ヒューが生まれた後、プレイ・グループ(社交性を身につけるために、近所に住んでいる就学前の子供たちが集まって、いっしょに遊ぶ会)で資格を持った指導員としてパートタイムで働きました。小さな子供のいる母親たちは子供をプレイ・グループに連れて来ますが、それを運営する指導員です。

その後、私たちはボーンエンド(Bourne End, バークシャー州に接している村)に移りました。そこは、今はバッキンガムシャー州(Buckinghamshire county)となっています。私はパートタイムで学校の教師の助手(teachers' aid)となりました。ケリーとケ빈は学校に入学していましたし、ヒューはその学校の角にあるプレイ・グループに入っていました。そこで、私はケリーとケ빈が行っている学校で働くことにしたのです。ヒューが学校に行くようになったとき、私はフルタイムの教師に戻りました。私は子供たちが行っている学校で働いていたので、子供たちに何かあれば、すぐに知ることができました。とても便利でした。でも、私は学校で自分の子供たちを教えたことはあり

ません。私たちは金銭的にゆとりができたので、もっと大きな家に移りました。1982年にオーストラリアに来るまで、私はフルタイムで教師を続けました。

私たちがオーストラリアに来る前、ピーターはアメリカの会社に勤めていました。当時、第1次不況(the first recession)でした。その会社はよく考えることもしないで、ヨーロッパのすべての職をアメリカに移し、アメリカからヨーロッパの業務を指揮することにしました。ですから、私たちの選択肢は、アメリカに行って住むか、会社を完全にやめるかしかなかった。ピーターは会社の仕事でオーストラリアにとっても頻繁に行っていました。ピーターは出張でシドニーにたまたま行ったとき、仕事上の人間関係を使って、新しい就職口を見つけました。ピーターはアデレードで働くことになっていました。そこで、私は本を読んだりして、アデレードについていろいろと調べました。ピーターは4月にオーストラリアに来ました。イギリスの学年は7月に終わりますから、私と子供たちは8月にオーストラリアに来ることにしていました。オーストラリアに先に行っていたピーターは私に電話をしてきて、「僕の最初の仕事を当ててごらん。僕はアデレードに派遣されて、その事務所を閉鎖することだ」と言いました。ですから、彼はアデレードで働くことができないわけです。私たちはすでにイギリスの家を売ってしまいました。でも、会社の人は「メルボルンで働めることができる」と言ってくれたので、私たちは安心しました。ということで、私は何回かアデレードに行きましたが、結局、私たちはメルボルンに住むことになりました。1982年以来、私たちはメルボルンに住んでいます。

長男はロンドン大学にすでに入学していました。彼はイギリスにとどまって、大学を卒業すると決めました。在学中に女性と知り合い、その後、彼女と結婚し、いまでも一緒です。ですから、長男はここで私たちと一緒に住んだことはありません。彼はロンドンにおり、孫の男の子も1人ロンドンにいます。私たちは長男とそれほど頻繁に会いませんが、電話では毎週話しています。ピーターは長男と毎日Eメールで連絡を取り合っています。このように、私たちは長男ととても親密です。

私の母親はまだ生きていましたので、私は2年に1度イギリスに行きました。母親は今年の5月に亡くなりました。私の母親が91歳のとき、膝がとてもわるくなりはじめましたので、老人ホームに入らなければならなくなりました。そこで、彼女は妹の住んでいるスコットランドに移ることに決めまし

た。彼女は妹の家の近くにある老人ホームに入りました。私はスコットランドによく行き、母親がどうかを見てきました。

私は1982年にオーストラリアに来ました。私がオーストラリアに来たとき、私たちは初めグレン・ウェーバリーに住みました。家族がここでの生活に慣れて落ち着くために、私は1年間仕事を休むことにしました。その後、私は教職に戻りたいと考えましたが、オーストラリア政府はイギリスで取得した私の資格を認めていないことが分かりました。イギリスを出たとき、私は学校で副校長に次ぐ地位にいました。イギリスの学校制度はオーストラリアと同じです。でも、オーストラリア政府は私がイギリスで受けた2年間の教師になる訓練を認定しませんでした。

私は働き先を変え、障害者のための作業場で働きました。ティーンエージャーや少し年長で、精神的や身体的に障害のある人たちがそこで働いています。作業場には教育講座があり、私はそれを担当しました。作業場は民間企業のようなもので、障害のある人たちを雇っています。そうした人たちは精神的あるいは身体的に能力が劣るので、普通の従業員のように働きません。作業場には、参加が自由な教育講座があります。彼らが望まなければ、学ぶ必要はありません。もし希望するなら、私のところに来て、学ぶことができます。何人かは読み方を習ったり、私に競馬で賭けるのを助けてもらったりしました。私は競馬の賭けが得意です。いろいろな講座がありました。何をやるかは、彼らが何を習いたいかにまったくかかっています。ある女の子はボタンのつけ方を習いました。私たちはブライトン(Brighton, メルボルンの中心から南東に10キロのところにあるサバープ)に家を買いました。職場はミッチャム(Mitcham, メルボルンの中心から東に20キロのところにあるサバープ。ブライトンから約20キロ離れている)とブラックバーン(Blackburn, メルボルンの中心から東に17キロのところにあるサバープ。ブライトンから約17キロ離れている)でしたから、通勤に片道1時間かかりました。ですから、私はとても疲れてしまいました。

その後、私は授業前と放課後に子供の世話をする活動(before and after school child care programme)に係わるようになりました。セント・キルダ(St. Kilda, メルボルンの中心から南南東に5キロほどのところにある海に面したサバープ)で子供の世話を2年間しました。次に、私はアルバート・パーク(Albert Park, メルボルンの中心から南へ数キロの

ところにある都心近くのサバープ)で子供の世話をする活動を立ち上げました。その後、ブライトン・グラマー・スクール(Brighton Grammar School, ブライトンにあるグラマー・スクール)で仕事に就きました。その学校で、子供の世話をする活動を立ち上げ、7年間運営しました。子供の授業が始まる前から両親が働かないといけなかったり、子供の授業が終わっても両親がまだ働いていたりするとき、私は両親に代わって子供の世話をしました。授業前の子供の世話としては、学校で朝食を食べさせたり、宿題をしていなかったら、宿題をさせたりしました。放課後の子供の世話としては、午後の紅茶をしたり、スポーツをしたりしました。料理をしたり、トランプをしたり、スポーツをしたりもしました。子供たちに何かを教えるというのではなく、子供たちの活動を監視し、子供たちに活動の計画を立てさせたりする仕事です。テレビを見ることもよくしました。学校をできるだけ家庭のような雰囲気にして、子供の世話をしました。その仕事は楽しかったです。

私がある日新聞のクロスワードを解いていると、外国で訓練を受けた教師を1年間の勉学で学士号レベルに格上げしますというモナシユ大学の広告が目にとまりました。それに応募して、授業を受けて、幼児教育の学士号(early childhood degree)を1994年に取りました。

私は幼稚園の園長として1994年から2000年まで働きました。義理の娘が重い病気にかかったので、最初の孫娘である彼女の娘を世話するため2000年に退職しました。私は2年半の間、1週間のうちに3日と2夜、それにしばしば週末も孫娘の世話をしました。義理の娘はだんだんとよくなりました。私の息子はアメリカで仕事に就いたので、家族でアメリカに行きました。別れは、息子の家族と私たちの双方にとってさびしいものでした。私は3回アメリカに行きました。息子夫婦ははじめ18ヶ月ということでアメリカに行って働きましたが、更に3年間滞在を延長してアメリカで働きました。今は、オーストラリアに戻ってきていて、離ればなれということではなくなりました。

息子の家族がアメリカに行ったとき、私はやる事がなくなりました。そこで、幼稚園のボランティアの仕事に係わるようになりました。さらに、工芸の講習会に行ったり、それ以外のこともしたりするようになりました。私は工芸をずっとやっていました。私が子供のとき、私の母親は縫うことが上手でした。私は縫うことは下手でしたが、刺繍をすることを楽しんでやっていました。私は工芸に興味をずっと持っていて、たくさんの講習会に行き習って

いました。私は編み物がかつてはしていましたが、今はしていません。以前は編み機や編み棒を持っていました。

私たちがオーストラリアに移住したとき、幸運なことに、最初に住んだ家の隣人にとってもいい夫婦がいました。ジョンとキャロルといいます。キャロルも工芸に興味があったので、キャロルと私は一緒にたくさんの展示会に行きました。私たちはとても親しい友人となりました。彼女は突然ガンになり、亡くなりました。ずっと昔のことですが、今でも彼女がいなくなってとてもさみしく感じます。私がオーストラリアに来たとき、末の息子は14歳になっていましたから、学校に行って他の生徒の父兄と会ったりすることはありませんでした。子供たちは大きくなっていましたので、子供たちを介して人と知り合う機会はありませんでした。私が人と知り合いになるのにおいて、キャロルにはとても助けてもらいました。彼女はあらゆる種類の人たちを私に紹介してくれました。彼女が紹介してくれた2人は、今では私の最も親しい友人となっています。さらに、ピーターの仕事を通じて彼の仕事関係の人たちと知り合いになりました。ピーターはゴルフを始めましたから、私たちはたくさんのゴルフ・クラブの人たちと友人になりましたし、今でもそうです。

スーはイングランド生まれです。私が彼女と知り合ったとき、彼女は夫とオーストラリアに30年ほどすでに住んでいました。彼女は、私たちがとても親しくしていたイングランドの友人を知っていました。ある日スーが私を訪ねてきてから、私たちはとても親しい友人となりました。彼女はたくさんの人を知っていました。そして、彼女は私に人を紹介してくれるなどして、私がメルボルンでの生活に慣れて落ち着くのを助けてくれました。彼女はイングランドで生まれ育ちましたから、私たちとたくさんの共通点があります。スー夫妻はイングランドの生活の仕方をずっと守って暮らしていてイギリス人（Englander）のようです。今では、私たちは自分たちの方がよっぽどオーストラリア人（Aussie）みたいだと思っています。私たちはイギリスとオーストラリアの2つのパスポートを持つことができます。もしどちらかのパスポートをあきらめなければならぬとしたら、私はイギリスのパスポートをあきらめ、オーストラリアのパスポートを持ち続けます。もしそうなったとしたら、スーはオーストラリアのパスポートをあきらめ、イギリスのパスポートを持ち続けるでしょう。スーは50年間もオーストラリアに住んでいるのにです。私は、スーがイギリスの生活の仕方を守って暮らしているのに感心してしま

います。

私は子育てが大好きです。新生児の世話は得意ではありません。ただ新生児を愛してあげるだけです。でも、新生児は6ヶ月をすぎると人間らしくなってきます。私はそうした子供に興味があります。私にとって、5歳までの子供はマジックのように思えます。私は幼稚園に行って、子供たちが突然何かをできるようになるのを見ると、今でもとても興奮します。

私たちの子供たちは普通の10代をすごし、それを切り抜けました。多くの青少年の問題は、不良の仲間集団の圧力から起こります。私たちの息子たちがそうした仲間集団の圧力から不良にならなかったのは、幸運なことでした。末の息子はメルボルン・ハイスクール（Melbourne High School、公立の男子校で、生徒は第9学年から第12学年までをおくる。入学者は選抜試験にもとづいて決められ、生徒の学力は高い。）でホッケーをしていました。私たちは息子のホッケーの観戦にしばしば行きました。息子の友人たちは今ではみんな結婚して、家族を持っています。私たちは息子の友人たちとまだ交際しています。子育てはたいへんな仕事で、現在も進行中です。末の息子は来年40歳になりますが、私たちは今でも彼のことが心配です。すべての親はそうです。子供と同じように孫を愛していますが、別の仕方です。孫を育てる責任はありませんから、孫を両親に返せます。孫とのつき合いを子供とのつき合いとは別の仕方です。子供たちが正しい意思決定をするかどうか心配です。もし息子たちがここにいたとしたら、息子たちは「ママ、よせよ。勘弁してくれよ。僕たちはママの世話をしよ」と言うと思います。

私たちはグレン・ウェーバリーに2年半しか住みませんでした。そして、ブライトンに移りました。正確に言えば、ガーデンベール（Gardenvale、グレンアイラ市を構成するサバープのうちの1つ）です。そこは高級住宅地でしたから、簡単に家屋を売ることができました。子供が巣立って、その家屋は夫婦には大きくなってしまったので、小さい家屋に住むためにここに引っ越してきました。ここには3年間近く住んでいます。来年の1月で3年になります。私が退職して数年後に、ここに引っ越してきました。

ピーターは完全に退職してはいません。まだ自宅で仕事を楽しくやっています。彼は都心にある弁護士事務所のために職場の安全対策用のコンピューター・ソフトを売っています。彼がソフトを売るこ

とができなければ、その事務所は給料をまったく払いません。彼の給料はいくつソフト売るかにかかっています。彼は真剣に働いているのではなく、楽しむためにときどきやっているのです。

何人かの人たちと退職のことを話したことがあります。夫が退職をすると、夫といつでも一緒にいることになり、まったく新しい日課に慣れないといけません。退職後、ピーターはいつもここにいます。ピーターは私が昼食を食べる時間よりももっと早くに昼食を食べるので、夫の退職後3日目に、私たちは一緒に昼食を食べないことが分かりました。私たちは昼間も一緒にいることになりましたが、まったく違う時間に昼食を食べるのです。でも、ピーターは火曜日、木曜日、土曜日にゴルフへ行くので、私だけがこれらの日には昼間この家にいます。ですから、うまくゆくのです。友人たちの話を聞くと、退職前に毎日の生活の仕方を決めておく必要があるようです。例えば、誰がシャワーをいつ使うかといったようなことです。新しい生活の仕方を決めておくことで、生活がうまくゆくのです。

私は自分自身でスポーツをしますが、クリケットに関心があります。私の祖母はクリケットのファンでした。その影響で、私は幼い頃に熱心なクリケ

ットのファンとなりました。私が自分自身でやるスポーツといえば、歩くことぐらいです。

③何に幸福を感じるか

私は集団の一員となることを楽しいと思いません。工芸品を作ることなら自分のペースでできます。でも、チームの一員となってスポーツをすることが好きではありません。私は他の人と協調してやってゆくことがまずもって得意ではないのです。

私は、道を挟んだ家の前にある老人大学で文章の書き方の講座を取ってみたいと思います。私たちが子供の頃、私の父親は自分で作った物語を私たちによく語ってくれたものでした。彼は物語を書き留めましたが、出版しませんでした。私はその物語を私の子供たちに語って聞かせたり、幼稚園でたくさんの園児に語って聞かせたりしました。子供たちはそれを楽しんでいました。私は物語を書き留めて、出版してもらえるかどうか当たってみたいと思います。もしだめなら、自費出版でもいいですから、出版したいと思います。

私は今パソコンを習っていますが、パソコン通信をやってみたいと考えています。